

- 1 . それから、主はモーセに告げて仰せられた。
- 2 . 「イスラエル人に告げて言え。
女が身重になり、男の子を産んだときは、その女は七日の間汚れる。
その女は月のさわりの不浄の期間のように、汚れる。
- 3 . 八日目には、その子の包皮の肉に割礼をしなければならない。
- 4 . その女はさらに三十三日間、血のきよめのために、こもらなければならない。
そのきよめの期間が満ちるまでは、聖なるものにいっさい触れてはならない。
また聖所にはいってもならない。
- 5 . もし、女の子を産めば、月のさわりのときと同じく、二週間汚れる。
その女はさらに六十六日間、血のきよめのために、こもらなければならない。
- 6 . 彼女のきよめの期間が満ちたなら、
それが息子の場合であっても、娘の場合であっても、
その女は全焼のいけにえとして一歳の子羊を一頭と、
罪のためのいけにえとして家鳩のひなが、山鳩を一羽、
会見の天幕の入口にいる祭司のところに持って来なければならない。
- 7 . 祭司はこれを主の前にささげ、彼女のために贖いをしなさい。
彼女はその出血からきよめられる。
これが男の子でも、女の子でも、子を産む女についてのおしえである。
- 8 . しかし、もし彼女が羊を買う余裕がなければ、
二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを取り、
一羽は全焼のいけにえとし、もう一羽は罪のためのいけにえとしなさい。
祭司は彼女のために贖いをする。
彼女はきよめられる。 」

説教

神さまは、イスラエルが神さまに喜ばれる生き方をすると、11章以降で具体的に生活のあり方を指示なさいます。

11章では食べてよい物と食べてはならない物について指示されます。

そして、12章から15章までは人間のからだにある汚れについて教えます。

12章は出産、13、14章は重い皮膚病、15章は性器からの漏出物について教えられます。

12章では出産の際のことについて教えられます。

冒頭の1、2節では、女性が「男の子を産んだときは、その女は七日の間汚れる」と言います。

1. それから、主はモーセに告げて仰せられた。

2. 「イスラエル人に告げて言え。

女が身重になり、男の子を産んだときは、その女は七日の間汚れる。

その女は月のさわりの不浄の期間のように、汚れる。

「その女は月のさわりの不浄の期間のように、汚れる。」、

さらに、「女の子を産めば、月のさわりのときと同じく、二週間汚れる」(5)と言われます。

そして、その対処として、

男の子の場合には、生まれて八日目に割礼をし、

さらには 三十三日間（汚れている七日間を合計すると四十日間、女の子を産んだ場合には計八十日間）

「血のきよめのために、こもらなければならない」と命じられ(4,5)、

「きよめの期間」が終わったら、

全焼のいけにえと罪のためのいけにえを主にささげて罪を贖うことが命じられます。

こうして後、出産した女性は晴れて神の民イスラエルの一員として正式に社会復帰をすることができるのでした。

ここでの重要な問題は、出産した女性がどうして汚れるのかということです。

「月のさわりの不浄の期間のように、汚れる」(2)とあることから、

「血を流す」ということが「死に向かっていく」ことである故に「汚れ」と言われていると思われます。

しかし、より根本的な理由としては、創世記3章16節にさかのぼって、

最初の女エバが悪魔に惑わされて神さまに背いたことに対する神さまの呪いの故であることが考えられます。

その時、神さまは言われました。

「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。

あなたは苦しんで子を産まなければならない。」

そうして、本来めでたく喜びであるはずの出産は、女性にとって呪われた苦しいものとなりました。

生理や、出産に関わる女性特有の様々な病気によって苦しめられ、

さらには出産それ自体もいのちがけの苦しみを伴うものであり、

加えて出産した後の子育ての悩み苦しきまで考え合わせると、

これはまさに女性に対する神さまの呪いの宣告「みごもりの苦しき」と言うしかありません。

人間の墮落する以前には
神さまに祝福された喜ばしいはずの出産は、
こうして人間の罪の故に呪われたものとなってしまいました。
もしも神さまの恵みがなければ、
確かに「みごもりの苦しみ」に満ちた出産それ自体は呪われたものです。
その女が産む子どもは罪の中に身籠もった呪われた罪人であり、
その呪われた罪人をこの世に産み出す女性も罪に呪われた者です。

それで、神さまは、まず生まれてくる男の子に生まれて八日目に割礼を授けるようお命じになります(3)。

3 . 八日目には、その子の包皮の肉に割礼をしなければならぬ。

割礼とは、男根の「包皮の肉を切り捨てる」儀式のこと(今で言えば包茎手術)です。
その意味は、神の民とされたことの「契約のしるし」でした(創世記 17:10-14)。

「キリストにあって、
あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。
肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。」(コロサイ 2:11)
使徒パウロが後にこう解説するように、
生まれつきの罪に墮落した生き方
(これを聖書では『肉』と呼ぶ)を脱ぎ捨てて、
神の民として神と共に生きる新しい生き方を意味します。

割礼は生まれて八日目に施されました。
エジプトでは 6-10 歳の間に、
イスラム教は 12-14 歳の間に割礼を施したことを考えると、イスラエルの生まれて八日目とは極めて異例の早さです。

理由は、先に述べた人間の原罪との関わりが考えられます。
人間は生まれながらにして死ぬほど罪深いのであり、
生まれた時から罪の生き方を脱ぎ捨てる必要がありました。
そして、神さまは、
その子がそのような罪深い者でありながらも、
生まれたばかりの包皮の肉を切り捨てることを通して、
その子がこの世から取り分けられたご自身の子どもであるという事実を、その「契約のしるし」を肉に刻まれたのです。
そのしるしは、
子どもが信仰の自覚をすることのできる前から、
ただ神さまの恵みにより、神さまに特別に選ばれて刻まれました。

八日とは、最初の一週間を過ごした後の、新しい週の初めの日を意味します。
そして、「一週間」とは、創造・完成・安息を含む一つの完全なサイクルです。
その一週間という一つの完全なサイクルを経た後の「新しい週の初めの日」です。
これは古い自分を脱ぎ捨てて新しく生まれ変わって歩み始めるにふさわしい日として聖書ではたびたび出て来ます。

例えば、

同じレビ記 15 章では、

漏出を病む者が漏出の呪いから解放されて八日目に（いけにえがささげられて）解放されました。

14 章では

重い皮膚病の人が癒された場合、やはり八日目に社会的、霊的な死の状態から解放されました。

民数記 6 章 10 節では、

死体に触れて汚れた状態になっているナジル人（神への献身者）のきよめも八日目でした。

これらはすべて、死んだ状態の者たちが、八日目に死人の中から復活することを意味します。

そして、このような律法の規定を踏まえた上で、

主イエスは、受難の一週間を経て十字架で死なれた後、週の初めの日に死人の中からよみがえられました。

それは、まさに、

古い肉を脱ぎ捨てて、新しい、言わば神の国である新天新地に属する復活のからだをもって生き始めることを意味します。

それは新しい再創造の日なのです。

割礼を施した後 33 日間、

割礼までの一週間を合わせて、計 40 日間は「血のきよめ」の期間として「こもる」よう命じられます(4-5)。

- 4 . **その女はさらに三十三日間、血のきよめのために、こもらなければならない。
そのきよめの期間が満ちるまでは、聖なるものにいっさい触れてはならない。
また聖所にはいってもならない。**
- 5 . **もし、女の子を産めば、月のさわりるときと同じく、二週間汚れる。
その女はさらに六十六日間、血のきよめのために、こもらなければならない。**

四十とは、聖書によると、神さまに見捨てられた試練を象徴する数字です。

例えば、四十年間、イスラエルは荒野をさまよいました。

エリヤは、四十日間、神の山ホレブを目指して荒野を歩き続けました。

あるいは、イエスさまも、四十日間、荒野で断食しながら悪魔と対決しました。

つまり、女性は、

血を流す最初の一週間で汚れた時として過ごし、

さらにはその後 33 日間できよめの期間として過ごしながら、

この合計 40 日の間に、自らの罪深さを徹底的に思い知らされます。

神さまの憐れみなくばもはや生きてはいかれないことを思い知らされます。

そして、このような自分をも見捨てることなく、

むしろ憐れんで、罪を贖って、ご自身の民としてくださる

神さまの恵みを思い出して、古い罪の生き方を脱ぎ捨て新しく神と共に生きることを考えさせられます。

そうして、きよめの期間を終えたら、

罪のためのいけにえをささげて祭司に自分の罪を贖ってもらい、

全焼のいけにえをささげて神さまへの献身を誓うのでした。

女の子を産んだ場合には、「汚れの期間」も「きよめの期間」もそれぞれ二倍の長さとなります。

5 . もし、女の子を産めば、月のさわりのときと同じく、二週間汚れる。

その女はさらに六十六日間、血のきよめのために、こもらなければならない。

どうして女の子を産んだときは二倍も汚れるのか、と疑問に思います。

その理由は、やはり女だからだと思います。

つまり、蛇に惑わされた女だから、ということです。

悪魔に惑わされて神さまに背いた女だから、特に二重の注意が必要ということです。

それだけでなく、女性は悪魔に惑わされて罪を犯した故に「産みの苦しみ」という呪いの下にあります。

その上、自分と同じ女の子を産んだとなれば、産んだその女性は一層気をつけねばなりません。

かつてのエバの罪を一層思い出さなければなりません。

そして、二度とそう生きてはなると、一層決意を新たにしなければなりません。

こうして、子どもを産んだ女性は、

男の子を産んだときには、

一週間の間、神さまとの交わりを断たれる「汚れ」の期間を過ごし、

その翌日八日目には、生まれた子どもに割礼を施して、

まず子どもが、古い呪われた人生から解放されて神と共に生きる者に新しく造りかえられ、

続いて、残りの33日間は「きよめの期間」として、

ひたすらこの世での責任を何も負うことなく、

何もしないまま、ずうっと引きこもりながら、

初めの女エバが悪魔に惑わされて罪を犯したことを思い出し、

二度とそう生きてはなると一層決意を新たに、

自分の生き方を考え、さらには自分が生んだ子どもをどう育てるかを、

誰にも邪魔されることなく、静かに、全く完全に静かに、じいっと考えなければならぬのでした。

そして、女の子を産んだ時には、一層、このことを考えるのでした。

これは恵みだと思います。

呪われているけれども、しかし、同時に神さまの恵みだと思います。

我が家のことを例に挙げると、二人目の娘を産んだ時に、家内が乳癌を患いました。

出産で体力と抵抗力が弱ったことが主な原因と言われました。

その話を聞いて、出産というのはまさにいのち賭けだと実感しました。

ちょうどその時、前任の牧師夫人も同じく乳癌を患い、しかも進行して末期になり、抗ガン剤治療をしておられ、

最後は身内のいる青森でということで青森に帰郷しておられるところを見ておりましたので、さすがに死を覚悟しました。

しかも、まだ若い三十才の時、癌の進行も早いと言われていたので、一層覚悟しました。

でも、さすがに死ぬことも覚悟しましたが、ただ黙って死ぬのも良くないと思い、

一週間病院に入院した後、退院して、それからふたりで三日間断食して祈り、それから玄米菜食を始めました。

そうしたら、病巣が少しずつ小さくなっていき、およそ三ヶ月後には病巣が完全に消滅したのでした。

ですから、このことは、まさにこのレビ記12章の通りだと思います。

このおよそ三ヶ月間に及ぶ、

言わばレビ記で言うところの「きよめの期間」を通して、

私たち夫婦は、一度失ったいのちを再び取り戻す経験を味わいました。
そうして、さらに自分たちの生き方について新たに考えさせられたのです。
ふたりで考えたけれども、
結論としては、
それまで神さまのためにひたすら生きてきましたから、
それ以外の、あるいはそれ以上の生き方は思い当たらず、
結局は、今後も今まで通り変わることなく神さまのために生きて、死ぬまで教会に奉仕しようということになりました。
自分たちの生かされたいのちを神さまにささげて生きるという再献身の思いを新たにさせられたのです。

子どもを産むということは、自分の人生の再出発を新たに考えさせられる良い機会です。
同時に、子どもをどう育てるのかをよく考えなければならない時でもあります。
この子どもは誰が授けてくださったのか、
神さまから託された子どもをどのように育てたらよいのか、
人はどこから来て、何のために生き、労するのか、
自分と子ども人生をよくよく考えなければならない貴重な時です。
そのような時に、
この世のつとめを離れて、
言わば神さまに見捨てられたような状態となって、
その中で、ひとりぽつんと、神さまと言わば「差し」で向き合おうのです。

そうして、
子どもの（古い生き方である）「肉」が脱ぎ捨てられ、
自らも、罪のためのいけにえにより罪贖われ、
全焼のいけにえをささげて主のために生きることを告白します。

これはすべて「汚れ」と「きよめ」の期間を通してです。

だから、これは神さまの恵みです。
呪いの中にある神さまの恵みです。
もっと言えば、呪いから真に解放して、神さまの民として歩ませてくださる神さまの恵みなのです。

私たちもまた同じではないでしょうか。
自らの罪を思い知り、
神さまの恵みに感謝して、神の栄光のために生きていかれるよう、主の御名により祈ります。